

## 受難週とロシアの十字架

牧師 山本 護

16世紀ドイツの画家 H.ホルバインの〔墓の中の死せる基督〕。西欧の宗教画はたいてい神々しく、十字架の死にさえも神の栄光が暗示されていますが、〔墓の中の死せる基督〕は、ただそこに人間の死が横たわっているだけの描写です。

「それはたった今、十字架からとりはずされたばかりの基督の絵であった」。この複製画が『白痴(ドストエフスキー)』のロゴージンの部屋にも架かっていて、彼が強く魅入られていることが分ります。ムイシュキン公爵が「こんな絵を眺めていたら信仰がなくなってしまうのではないか」と述べると、ロゴージンは「その通り、現になくなって行くところなんだ」と信仰の退色をあっさり認めます。

イスラーム学の泰斗、井筒俊彦(1914~93)は若い頃、ロゴージンとムイシュキン公爵との対話を引いてこう記しました。「信仰ある多くの人々を~信仰の拒否に導いて行くこのものすごい〔死骸〕こそ、同時に多くのロシア人の胸にあの狂乱のような信仰の陶酔を生み出す源泉でもあるのだ~無我夢中の信仰と、恐ろしい神聖冒瀆とがここに共存している(『ロシアの十字架』)」。

十字架にかけられたイエスが最後に発した言葉、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか(マルコ 15:34)」。最初期の福音書マルコが伝える死に方では、ムイシュキン公爵が危惧したように「信仰がなくなってしまう」不安がよぎります。ところがルカ福音書では、叫びの後「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます(ルカ 23:46)」と言い、神の子の忠実が示されてひと安心。またヨハネ福音書の最後の言葉は「成し遂げられた(ヨハネ 19:30)」。神の子の使命は果たされ、信仰者を納得させてくれます。

〔墓の中の死せる基督〕を示して井筒は言います。「この余りにもなまなましく人間的で、〔完全に自然法則に従って死亡した〕基督の像は実にぴったりとロシアの基督教の性格を象徴している」。ロゴージンのように教会の〔信仰〕は劣化しても、かえって十字架のイエスへの愛が深まっていくという傾きがロシアの民衆にはあるのでしょうか。「基督が真理の埒外にいることが証明されたとしても、僕は真理よりも基督と一緒にいたい」。ドストエフスキーが手紙で書いたこの有名な言葉が、頭の中をぐるぐる巡ります。

ゴルゴタで、神の子の特権などなく死んだイエスの十字架。この十字架は東方正教会によって北へ運ばれ、その広い大地に根づきました。キエフの十字架、モスクワの十字架。「この余りになまなましく人間的な基督」は、大地の根茎をつたって八ヶ岳教会の十字架としても発芽しています。受難週、復活という逆転の筋書きを想定せずに、ガリラヤの女たちのように立ち尽くしていた(マルコ 15:40~41)。ウクライナの兄弟と共に、ロシアの姉妹と共に、人間の真理や義ではなく、そこに起こっている基督の死を見つめたい。Ω

